

仕出原



国道381号から北に入り、大井野地区を経た北隣に位置する仕出原地区。ここは五社さんが鎮座する地区で、現在47世帯・109人が暮らしている。



五つの鳥居が並ぶ高岡神社

元禄七年に窪川山内家から奉納された、金属でできた幣「金幣」が保管されている。驚くことに、この金幣は今も使用されている「現役」である。

さて、この地に、幕末から明治にかけて岩崎忠雄という人がいた。この人物はたいへん聡明で、動乱の時代に事を成すには、その器量もじゅうぶんに備えていたそうである。

ところが、時代の荒波に身を投じる気がみなぎっていた矢先、岩崎家が代々務めてきた神官を継ぐ者がいなくなってしまうため、やむなく神官を継承することになるのである。忠雄は私塾を開き、自らの思いを後進に託すなど、この地で自分にできる精一杯の活動を行う。谷干城の父親が忠雄宅に一時身を寄せていたこともあるという。忠雄は、時代が大きく展開していく中で、土佐の奥地の山間に留まらねばならなかった自らの境遇を終生悔やんだ。明治43年、71歳でこの世を去る時に詠んだ辞世の句が残っている。「山を食ひ 海を呑むべき時なるに なれどめめしき道をたどれる」

仕出原を語る時に五社さん抜きには語れない。正式には高岡神社という。古くは「仁井田明神」といい、社殿が五つあることから「五社さん」と呼ばれるようになった。一説によれば、創建当時は六つの祭神があり、それを一社に合祀していた。その後、平安期にこの地を訪れた空海が、神仏習合の概念に基づき、この境内に、神宮寺(神社に附属して建てる寺院)として「福円満寺」を開き、四国霊場三十七番札所に加えた。この時に五社に分祭し、五社大明神と改称したという。

五社さんの始まりよりも、仕出原の歴史はさらに古い。四万十川を挟んで神ノ西遺跡のちようと対岸にあたるこの地に、縄文時代後期の土器などが多数出土した遺跡があるのである。

ところで、仕出という地名の由来であるが、注連縄や神事で用いられる「幣(ぬき・しで)」のことではないかという説がある。つまり、もともとは「幣原」だったのではないかというのだ。この地区の氏神様として、大三島神社があるのだが、ここには、江戸期・



重厚で堂々たる「金幣」

町のうごき	(12月31日) 人口		前月比		出生		死亡		転入		転出	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	8,577	9,550	-7	-18	6	3	14	19	9	14	8	16
	計	18,127	-25		計	計	33	23	24			
	世帯数	8,625	-16									

(12月中の届出)

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	1月8日
リン酸	≤ 5.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.35
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以上

調査：大正(吾川)

資料：四万十高校自然環境部

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/> ●

※広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)